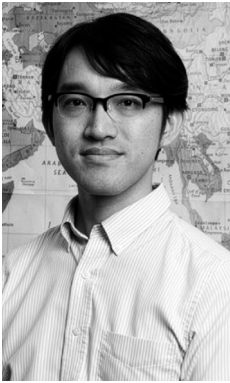


「ぼくは13歳 職業、兵士。 ～アフリカの元子ども兵が教えてくれたこと～」



鬼丸 昌也 (おにまる まさや)

認定NPO法人 テラ・ルネッサンス創設者／理事

認定NPO法人テラ・ルネッサンス創設者／理事。2001年、大学4年生の時に、初めてカンボジアを訪れ、地雷被害の現状を知り、「すべての活動はまず『伝える』ことから」と講演活動を始める。同年10月、大学在学中に「全ての生命が安心して生活できる社会の実現」を目的に、「テラ・ルネッサンス」設立。同団体では、カンボジア・ラオスでの地雷や不発弾処理支援、地雷埋設地域の生活再建支援、ウガンダ・コンゴ・ブルンジでの元子ども兵や紛争被害者の自立に必要な支援を実施している。2022年、約100のNGOが加盟する、NPO法人国際協力NGOセンター（JANIC）の理事長に就任。「対話」と「連帯」による社会変革を目指す。

【この講演は、令和7年6月11日の令和7年度初任行政研修において行われました。】

「問いから始まる挑戦と行動」

自分に何ができるのだろう。今の自分に何ができるのだろうという問いが、いわゆる自分が何を果たすべきかというものを探っていく大きな手掛かりになりますので、今日は、そういう訓練だと思ってこの2時間半を使っただけならば、いろんな意味でお互いにとって実りある時間になるのではないかなと思いますので、よろしくお願いします。

テラ・ルネッサンスという団体を、大学4年生のときに一人で創りました。今、世界10か国で活動しています。主に紛争の被害者、地雷の被害者とか元子ども兵とか、ウクライナ西部でも活動していますので、国内避難民や、最近はミャンマーなどで大きな地震がありました。そういった災害の被災者とか、困難を抱えた方々の自立を支援するために、職業訓練とか識字教育とか、そういった幾つもの支援を組み合わせで行う。そういう複合型支援を24年間、世界10か国でやってきています。僕自身は、海外の現場で事業を組み立てるよりも、創設以来ずっとそうなのですけども、こういう講演をしたり寄附のお願いに行ったりするファンデレイジングを、専ら日本と台湾で担当しています。

今、無関心でいられても無関係ではられない時代に僕たちはいます。皆さんに申し上げられるとするならば、問いを持つことがとても大事なのだと思います。答えを見つけることよりも、仕事をする上においても、人生を過ごす上においても、大事なことはよい問いに出会うことなのだと思います。問いさえあれば、仕事で困難な状況にぶつかっても、例えば何かの課題にぶつかって

としても、その問いを基に、じゃあ、どうしたらいいんだろう？と考えられますよね。これが答えなんだ、これしかないんだと思ってしまうと、それが適用しない状況になったときに心が折れてしまう。大事なことは、問いに出会うことなのだと思います。問いを探すことなのだと思います。皆さんもこれからいろんなお仕事でいろんな苦勞をなされると思うんです。きっと。でも、そんな中で、じゃあ、自分は何で公務員になったのだろう。何で今この省庁で働いているのだろう。私の行く先に何を見たかったのだろう。という問いがきっと何かを支えてくれるときがあるのだと思います。

「サルボダヤ運動の教え」

この写真の左側のおじいさん。名前をアハングマジー・チューダー・アリヤラトネと言います。アリヤラトネ博士と言います。僕は敬愛を込めてアリ博士とよ



く呼んでいます。昨年ですかね、残念ながら92歳でお亡くなりになりました。アリヤラトネ博士は、サルボダヤ運動というスリランカで最大のNGOを作った方になります。サルボダヤ運動と言います。日本においては、1970年から1980年の農村における青年運動に精神的な影響を与えた方です。

このサルボダヤ運動の人たちはどうするかというと、お金をあげるわけでもなく、物をあげるわけでもなくて、まず、職員を一人この村に派遣するのですね。何をするかというと、村長だけじゃなくて、例えば大人から子どもまで、年寄り、そして女性、例えば障害を持っている人、持っていない人、お坊さんから警察官。このコミュニティに関係する人を全員集めておいでというのです。集めてくるのです。集めてきて何をするかというと、自分たちのコミュニティの課題について徹底的に話し合わせるのです。自分はこう思う、自分はこの村の中でこれは課題だ、自分はこの村のこのシステムが変だと思う、などととにかくみんなに語らせていく。

人は語ると主体性を帯びてきます。人は語り始めると、皆さんもね、この初任行政研修で復興の現場とか被災地に行かれたと思います。自分たちの村、自分たちの町を変えていこうという人は、静かだけれども強い思いを語ってくれる、そんな現場に出会った方もいらっしゃると思います。人は語り始めると当事者性が増していきます。いろんなことを話し合う。課題が出てくる。でも、全ての課題にこの村が一遍に取り組むだけのリソースはありません。お金も人手も限られています。なので、次に何するかというと、その村の課題とその村のリソースを見比べて、じゃあ、どれから解決しようかねと、簡単に言うとみんなで話し合うんですね。じゃあ、この村は女性が働けない、子どもがいるんだとか。じゃあ、この子どもを預ける保育園を作ったら、その人たちも働いて現金収入を稼げるよねという話になるんです。じゃあ、保育園を作ろう！となります。みんなで合意したコミュニティの目標に向かって、それぞれにできることを持ち寄って、自らの力で自らの資源で自らのコミュニティを変えていこうという内発的な発展。外からの動機づけで何かを変えようとするのは外発ですよ。ただ、外からの動機づけでコミュニティや人を変えていくというプロセスも当然大事です。だから、そのプロセスは例えば補助金だったりとか、例えば優遇税制だったりとか、そうやってインセンティブを付けて変えていく動機づけは大事なのです。ただ、正直に言うと、これだけでは変わらないです。これはきっかけになったとしても、大事なことは、そのコミュニティに当事者

がいるかどうかです。俺、変えたいんだよね。この村、この町、この企業。それだけの思いを持った人がいるところは必ず変わる。その当事者性を全てのコミュニティの構成員に持たせようとしたという活動がこのサルボダヤ運動で、その考え方がノーベル平和賞の候補に複数回も挙がったりとかするということにつながっていたりします。

人の意欲を引き出すって、コミュニティの意欲を引き出す上においてはとても重要な考え方です。博士がこう言い始めたんですよ。一生懸命やってきたことが駄目になったとしても、誰も話を聞いてくれなかったとしても、また人は変化をする。だって、それぞれに未来を創る力、つまり変化を起こす力がある。次の瞬間にはまた変わっていく。その変化を起こす力があなたにも全ての人にもあるのだということを信じていれば、きっと君は変化の主体者になれる。博士はこう仰ったのです。期待するとは言わなかったのです。全ての人に未来を創る力があると、期待をしろと言った訳じゃないんです。信じろと言ったんです。期待をするのと信じるのとは少し違いがあります。

信じるって無条件ですよ。だって、相手がどうであっても信じるでしょ。市民や国民を信じるという感覚もこういう感覚なのかもしれません。変なことを言うてくる人もいます。訳の分からない運動をしてくる人もいます。でも、この領土の中に生きている一人の生命なのですよね。国民なのですよね。公に奉仕するということは、きつこうということなのだろうと思うのです。その人の可能性を、その人の存在を、主義主張は違えども信じることから「公」って形成されてくると思うのです。それはちょっと大変なことかもしれません。時折しんどいことかもしれません。でも、そうすることによって一つの共同体の意識が育まれていって、国というものが成り立っていくのだらうと思うのです。だから、信じるという行為はあらゆる物事、変化の出発点なのだと、今となってはそう思います。

「戦争の残骸が奪う未来」

当時関わっていた神戸にあるNGOの皆さんと一緒にカンボジアに行くことになったのです。カンボジアというのは今どんどん経済成長しています。都市部の発展は著しいです。中央銀行が仮想通貨を使い始めたとか、いろんなチャレンジがカンボジアの中では起こりつつありますが、それでもなお、過去の紛争の影響は未だに残っています。50年前のカンボジアの激しい内戦。ポルポ

ト、ヘンサムリン、様々なアクターがこのカンボジアを国土が焦土と化すぐらい戦ってきました。その影響の一つが地雷です。都市部にはほとんどありませんが、まだカンボジアの周辺部に行くと地雷はたくさんあります。カンボジアという一つの国に埋まっている地雷を全部取り除こうと思ったら、皆さんあと何年ぐらいかかると思いますか。何年かけたらカンボジアの地雷を全部除去できるといいますでしょうか。大体600年かかるという説があります。今のペースでいくとカンボジアだけで600年かかります。だから、何を皆さんに申し上げたいかと言うと、地雷の問題は過去の問題ではなくて、今の問題であり、そして、これからの問題であると言うことです。

昨年、宮崎空港が閉鎖されたのを覚えていらっしゃるでしょうか。不発弾が爆発して、その処理のために自衛隊の皆さんに御尽力いただきましたけれども、何日間か滑走路が閉鎖されましたね。戦後80年、日本においてもまだまだ沖縄をはじめ不発弾の影響がありますよね。つまり、地雷の問題は正に今の問題であり、将来の問題です。だから、これからもいろんな影響をもたらしていくんです。そして、地雷だけではなく。例えばパレスチナのガザもそうです。テラ・ルネッサンスも活動していますウクライナもそうです。たくさんの爆弾が落ちてきます。あの爆弾で全部がそのまま爆発するわけではありません。一定割合は不発弾として地面の中に残ってしまう。これって地雷と同じ効果をもたらします。いやいや、地雷よりも大変なのです。地雷というのは、人が踏んだときや物が乗ったときに爆発するように設計している訳ですから、要はそれ以外のショックにはできるだけ対応しないようにきちんとデザインされている訳ですよね。でも、爆弾って、本来爆発すべきものが何らかの事情で爆発しなくて残っている訳ですから、ちょっとしたショックで爆発する訳でしょ。

ガザだってウクライナだって、我々が望む形かどうかは分からないけれども、いずれは平和がやってきます。どんな形の平和かは分からないけれども。ただ、地面の中に埋まっている不発弾や地雷は、地上が平和になったことを知りません。そこで子どもが歩いていても、そこで普通に農民が田畑を耕していたとしても、体は爆発するのです。触れたならば。だから、他人ごとのように申し上げますけれども、戦争なんかしない方がいいですよね。その後の復興にどれだけ人的若しくは金銭的な負担がかかるかということは皆さんにも御承知置きいただきたいと思います。そんな世界をどう創っていくのかというのが我々に課せられていると思うのです。

「未来を創る力」に気付いたとき」

このときはそういうことがとてもショックでした。地雷除去にすごい時間がかかる。今日は詳しくお話ししますが、そのとき、25年前にたくさんの地雷の被害者の話を聞きました。子どもの被害者の話も心に迫ってきました。でも、一番僕の心に迫ってきたのは、大人の男性の地雷の被害者のお話でした。それまで働いていた。家族を支えていた。それができなくなった。だから、アルコールに走って、そして家族にも捨てられて。そうやって独りで暮らしている。地雷が奪ったものは手や足だけではなくたのです。その人の人生や、その人の希望や、例えばその家族との幸せな暮らしそのものを奪っていく。つまり、可能性を奪っていく。しかも、長い時間をかけて、将来にわたって。そんなことが心の中にどんどん入ってきました。そして、そんなことを受け止める中で、ふとこんなことを思ったのです。じゃあ、地雷をなくして世界を平和にするために自分に何ができるのだろう、今の自分に何ができるのだろうと考えたのです。でも考えたのですが見つからないのです。だって、地雷除去の技術を持っているわけじゃありません。地雷除去の技術って、人道的な地雷除去において技術も必要ですし、習熟度も必要です。善意だけで地雷を取ってあげようと思って取ってあげることもできません。

何を皆さんに申し上げたいかという、要は、目の前にある課題に対して、何とかしたいという課題に対して、自分の中に見つけられないことばかりだと言うことです。何がショックだったか？ 課題そのものよりも、その課題に対して今の役職で、今の経験で、今の能力でできない自分に一番ショックだったのです。人と比較して、その問題が大きい小さいかは関係ありません。目の前の課題が全てですから。目の前の課題に対して何もできないなと思うと無力感を感じてしまう。

そんなときに思い出したのが、先ほど申し上げたアリヤラトネ博士の言葉でした。アリヤラトネ博士は、全ての人に未来を創る力があると仰ったのです。頭のいい人、お金がある人、特別な権力を持った人とは言わなかったのです。「全ての人に」と言ったのです。未来を創る力がある。あなたにもあるのです。みんなにもあるのです。僕にもあるのです。ああ、僕にもあるのだと、そう思ったのです。そう思った瞬間、何が変わるかというと、自分に対する見方が変わってきます。自分に対する見方が変わる。自分の仲間たちや上司たちに対する見方が変わってきます。僕らにもできることがある。僕ら

にもできることがあるのだという視点を持って、自分や自分たちのチームを見直していく。それが僕は社会課題を解決する最初の第一歩だと思うのです。私たちにも主体的な力があるのだと気付いた瞬間に、何か分からないけれども、やろうとする気持ちが生まれてくる。そんな現場を民間でも、行政の中でも、地域の中でも、そして海外の紛争地においても僕はたくさん見てきました。だから、考えたのです。じゃあ、僕に何ができるかな？ そう考えたときに一つだけ見つかりました。何が見つかったかということ、人に伝えることだったら僕にできるということです。

「愚直の連なりが社会を動かす」

お陰様で、この24年間で大体23万人の人にお話をすることができました。これだけの人に話をしたからすごいよねということを言いたいのではないです。人に語るってささやかな行為ですよ。人に何かを伝えていく。こんな問題があるよ、こんなことしたいんだよと。ささやかな行為です。でも、是非皆さんと分かち合いたいのは、人には、人間には、とても美しいものがある、それは時というものです。時間というものです。ささやかな行為でも、繰り返し、繰り返し、繰り返し、特に皆さんのお仕事なんかそうかもしれません。小さな小さな変化を積み重ねてきて、人々の幸せと暮らしを守っていく。それでなかなか評価されないかもしれない。でも、その小さな変化が積み重ねていったある瞬間、ふと後ろを見たときに何か変化をしているということがあります。それが「公」を変えていくということなのだと思います。

例えば、今日は「人権」という課題ですが、人権を守ってきたいろんな活動家の先輩たちも、愚直に小さな小さな小さな小さな変化を積み重ねてきたのです。その一つ一つが運動なのです。そのささやかな行為の積み重ねが、今日これからお話ししていく様々な社会課題を変えていく。もっと言います。社会課題を変える以上に大事なことは、社会課題を生み出して人権侵害を起こしている社会構造そのものを変えていかなければいけません。社会構造なんてそんなに簡単に変わりません。でも、変えなきゃいけない。そんなことを気付かせてくれたのは、お話を聞いてくださったたくさんの人たちだったりします。そんなこんなでお話をしているうちに、じゃあ、寄附してもいいよという人も出てきました。中には、一緒に働きたいという人も出てきました。

今日ここでお話ししたかったのは、どう変えていくか

が大事だということです。そのどう変えていくかを考えるときに、もう一つ大事なことは何かと申し上げるならば、それを変える主体者は自分であるという自覚を持つことなのだと思います。ですので、ささやかな経験なのですけれども、こうやってテラ・ルネッサンスという取組を少しずつこんな経緯で始めさせていただいたところをお話させていただきました。

皆さんにお聞きしたい、問いかけたいと思います。皆さんが見てみたい未来ってどんな未来なのでしょうね。そして、皆さんが得たいと思っている未来の中で、皆さんの大切にしたい方はどんな顔をしていたり、どんな表情をしていたり、どんな感情を持っていたりされるでしょうか。是非、この研修の間、答えは出ないかもしれませんが、御自身に聞いてみてください。きっと、それを見てみたいという勇気と動機が自分たちの仕事を前に進めさせてくれる、何かを生んでくれるような気がすごくしています。

「カンボジアから始まった問題意識」

これから、私たちが取り組んでいる一つの具体的な課題についてお話をさせていただきたいと思っています。それが子ども兵という課題です。世界には様々な人権にまつわる問題がありますが、子どもが兵士になっているということは、一つ、僕は大きな人権上の課題だと思っています。私たちが子ども兵の問題に取り組んでいるのは、アフリカのウガンダという国になります。ウガンダという国で2004年に調査をして、2005年から私たちは子ども兵の問題に取り組んできました。

これから子ども兵について少し皆さんと共有をしたいなというふうに思っています。ウガンダにしてもアフリカにしても、今から語ることはその一面でしかありません。今日はそのアフリカ、特にウガンダの一部分としての紛争と子ども兵の話なのだというふうに捉えていただけるといいなと思っています。

何で僕らは子ども兵の問題に関心を持ったか。それはカンボジアがきっかけです。カンボジアで地雷除去の支援から、今度は地雷で被害を受けた人たちの生活再建とか社会復帰の事業を始めました。地雷の被害者に何人も出会います。その中で、カンボジアの内戦中に子どもだった、そして、その子どものときに兵士にされた。それで障害を持った人や心に傷を抱えたという人に出会ったんです。ああ、子ども兵という存在がいるんだと、そのとき初めて、2003年、僕らは学びました。でも当時、日本で子ども兵の問題に取り組んでいるNGOはほとん

どありませんでした。はっきり言うと二つぐらいです。一つはアムネスティ・インターナショナルで、人権の問題として子ども兵の問題に取り組んでいました。もう一つが、我々の先輩ですけれども、ピース・ウインズ・ジャパンで、リベリア難民の帰還支援の一環として、難民の中に元子ども兵がいたので、元子ども兵の職業訓練をしていたくらいでした。子ども兵の問題に関連する団体がなかったら、当然日本にも子ども兵に関連する情報が少なかった。そこで、どうしたかという、だから現場に行こうと思いました。何が起き、どんな人が子ども兵になるのか、どんな苦しみがあって、なぜそれが生み出されているのかを確認しないと正しい解決策なんて出せないと思ったのです。

僕らのNGOの先輩からいつも言われていました。鬼丸君ねと、この世界では推測で問題が解決した試しはないんだよ。だから、まず確認をすることなのです。皆さんもそうですよね。現場を訪ねること、あと、数字も大事な事実ですよね。統計もとても大事ですよね。そこから分析をしていって、正しい政策若しくはアプローチをしていく。だから、ちゃんと確認をすること。そして、確認の前段として観察をすること。リーダーシップを発揮したいと思われるならば、観察をする力を磨くしかない。その対象となる地域や施策の対象となる人々や業界がどういう人たちで、何を抱えていて、これをやるとどうなるのだろうかとしっかり観察すること。観察って漢字のとおりですね。観じて察すると書きますものね。あらゆる感覚とあらゆる数字を使って観察をしたところに何かが見えてくる。じゃあ、何でウガンダか。世界には子ども兵と呼ばれる存在が今でも30万人くらいいるとされています。そして、この6割は大体自ら進んで兵士になると言われているのです。一つは貧しさ。もう一つはやることがない。あとは、教育とか宗教上の理由。戦うことが正義だと教えられたら、そりゃあ戦いに行きますよね。そういった理由で自ら戦っていく。ただ、ウガンダの場合は、コロンビアとか例えばアフガンとかコンゴとかもそうですけれども、他の国と子ども兵の事情が違ったのが、99%、神の抵抗軍という武装勢力による拉致や誘拐によって兵士にされてきたことです。

「なぜ子ども兵が生まれるのか」

行ってみて8人の元子ども兵たちに出会いました。下は12歳から上は28歳にまでなっている、子ども時代に兵士だった人たち。

一人だけ今日紹介させてください。彼は12歳のとき



に神の抵抗軍に誘拐されます。誘拐された後、訓練を受けます。銃の扱い方、軍隊のルール、そして、その後に何をさせられるかということ、自分の生まれ育った村に襲いに行かされます。極端なケースですが、彼もそうだったし、これは他の国でも同じ事例があるのです。自分の生まれ育った村に襲いに行かせるんです。当然そこには彼の家があります。その家の中に彼のお母さんがいます。一緒に襲いに行った神の抵抗軍の大人の兵士は、この12歳の少年の目の前にそのお母さんを引きずり出してくるのです。そして、彼に命令するのです「その女を殺せ」と。でも彼は「嫌だ」と言うのです。だって自分のお母さんですものね。嫌だと。そうしたら彼は銃の反対側でボコボコに殴られて、今度はこういうふうに言われるのです。「分かった。お前がその女をどんなに大切にしているかよく分かった。だったらその女の腕を切りなさい。そうしなければ、お前もその女も殺す。」仕方がないですよね。だってそうしなければ自分も大好きな母親も殺すと言う訳だから。彼はそのとおり実行していく。

子どもを兵士にする大きな一つの理由は、彼らが純粹であるということです。一つの暴力、一つのイデオロギー、一つの信仰によって容易くコントロールできる。つまり、優秀な殺人マシーンに仕立てることができる。なので、子どもたちを兵士に使うという現状は未だにそ

う変わってはいません。

彼もそうだったのです。そして、僕らが出会ったちょうど2週間前に、彼は実は母親と再会していました。皆さん、写真をよく御覧になっていただきたいのです。この左足、傷ついています。ウガンダ北部の内戦において、傷ついた子ども兵は神の抵抗軍に置き去りにされます。だって、戦争の邪魔です。そこを敵対しているウガンダ政府軍が救出をします。人道的な観点ではありません。あくまでも尋問するためです。だって、敵の情報をいっぱい持っていますから。だから、救出して病院に運んでいって治療を受けて健康になれば「あんた、敵はどこにいるねん。」というふうに話を聞こうとする。そうやって担ぎ込まれた病院にたまたま母親が入院していた。母親と再会したときのことを彼は僕らにこう言ってくれました。「僕はね、お母さんが自分のことをどう思っているかすごく心配なんだ。でも、お母さんはこう言ってくれたんだ。あんた大変だったね、苦しかったねと。そうやって僕のやってきたこと、させられてきたこと、最後まで全部聞いてくれた。それはすごく嬉しかったんだ。」でも、その後にもう一言言うんです。今でも、無表情で淡々とまるで他人のことを語るかのように話をしてくれた彼の表情を覚えています。彼はこう言います。「でも、僕には分かる。お母さんは、前と同じように、以前と同じように、僕を愛してくれることはない。受け入れてくれることはない。だって僕は、あんなことをしてしまったから。」当時そう語ってくれた彼の年齢は16歳です。日本で言えば高校2年生ぐらいの年齢ですよ。こんな体験を持った元子ども兵達にたくさん出会いました。

じゃあ、何でこんな子ども兵が存在するんでしょうか。乱暴かもしれませんが、大きく三つ、背景があると私は思っています。まず、子どもが素直で、つまり信仰、イデオロギー、様々な洗脳、先ほど使ったような暴力でコントロールしやすい。もう一つは、武器が小さく軽くなったというのも子どもを戦闘の主人公にしていきました。小型武器の不法流入によって、ウガンダでも安価にAK47とかアメリカのM16もたまに入ってきていましたけれども、それらを使って子どもに渡すと戦えますものね。でも、もう一つ大きいことがあって、子ども兵がいるということは紛争があるということです。この紛争、世界のいろんな紛争と私たちの暮らしには関係があるのだ、私たちの暮らしと無関係ではないのだということが、回り回って子ども兵たちを存在させているということに気付いたのです。

「資源をめぐる争いの最前線」

そのことを分かりやすく示してくれる国がアフリカのど真ん中にあります。コンゴ東部、南キブ州。ブカブという町に活動拠点を置いています。このスタッフたちは本当にすごいと思うのは、ブカブ、南キブ州の州都なのですけれども、ブカブに侵攻する2日前に車と主要な書類だけを持って南側に撤退していたので、何とか車、その他の重要な備品は守り抜けたことです。なので、隣のブルンジにあるもう一つのテラ・ルネッサンスの事務所と連携しながら、今、日本のNGOではほぼ唯一、緊急人道支援をコンゴ東部ではほんの僅かですけれどもやらせていただいています。今回、法的にも有り難かったのは、JICAのコンゴ事務所が本当に異例中の異例なのですけれども、何とか緊急人道支援をしたいということので1か月で案件形成してくださいまして、ブルンジに逃げてきたコンゴ難民の支援をJICAの皆さんと一緒に行うことができたのは、本当にこれは嬉しかったです。権限や役職を乗り越えて、目の前の人のためにチームとして何とかしようと。本当に四六時中頑張ってくださいました、熱い志を持った方がいらっしゃったというのは、とてもとても嬉しかったなとすごく思います。

コンゴ東部には世界最大のPKOが展開しています。約2万人とも言われていますが、治安は回復されていません。コンゴ東部の内戦ではこんなこともありました。2013年です。私たちが調査に行った村、この村に、コンゴに100ある武装勢力のうち一つの武装勢力がここを襲いました。襲撃したんです。6,000人の村人のほとんどが避難していて、誰一人いなかった場所でした。ちなみに、その武装勢力がこの村を襲ったときに、最初にターゲットにした施設って、皆さんどんどころだと思いますか。皆さんも一度は使ったことがあります。皆さんの生まれ育った町や村にもあります。それがどこかというと、病院です。だって、病院だったらターゲットが動かないでしょう。この村では38人が亡くなりました。この講義を聴かれている方は大人だけですのでしっかり申し上げますと、そのうちの3分の2は生まれたての赤ん坊と赤ん坊をお腹に抱えた女性たちになります。これと似たような戦闘が今もこの瞬間、コンゴ東部では続いています。

コンゴ東部で未だに激しい戦闘が起きている一つの理由、現代を生きる私たちが受け止めなければいけない理由、背景、原因があります。それが何かというと、今この部屋の中にもあります。皆さんのお手元にもあります

よね。スマートフォン、タブレット。それこそ僕も使っていますけれども、パソコンもそうだし、最近の電気自動車の電池なんかもそうですよね。いわゆるレアメタル。採れる量が少ない、採れる地域が限られている。そんな希少価値の高い資源や、あと、コンゴの場合、金も採れるし、金は大きいですね。広島に落ちた原爆のウランの大半（75～80%以上とされる）はコンゴ産です。80年前、広島上空で炸裂した原爆の原料はコンゴで採掘され、ベルギー経由でアメリカに渡ったものです。つまり何が言いたいかというと、コンゴは、大昔はゴム、それ以降も様々な希少価値の資源を巡って外国勢力が介入してくるんです。資源が欲しいから。鉱物資源を不当に採掘して国際市場に持って行ったら高値で売れますよね。こんな状況がずっと続いています。これはタンタルという鉱石です。携帯とかスマートフォンでいうとコンデンサー、電気を綺麗にする部品に使われていたりします。他にもタングステンやスズ、様々な鉱物資源がコンゴで大量に採掘されています。

コンゴ全体のGDPの成長率は5%、6%を平均で記録していますから、非常に高い経済成長率を誇っています。でもね、これコンゴで実際にタンタルを掘っている現場なのですけども、要は手作業なんですね。この人たちに聞いたんですよ。「あんた幾ら稼いでんの。」と。そうしたら一日どんなに頑張っても1ドルなのですよ。だから、150円か200円ですよ。カップラーメンも買えない。彼らは言うのです。「俺たちだってこんなことをしたくないよ、だって、でも、見てごらん。コンゴの大地ってすごく肥沃なんだ。俺たち農民さ、農作業したいよ、そりゃ。でも、立って農作業してたらさ、襲撃の対象になるんだ。現金稼げる手段がこれぐらいしかないんだ。」彼らは私たちにそう語ってくれました。なので、コンゴは、一人当たり国民所得でいうと世界最下位に入ります。つまり、国の豊かさと国民一人一人の豊かさがこんなにも乖離をしている。そして、未だに戦闘が続いている。コンゴ東部のインフラはなかなか建設が進みません。しかも、今回の1月からの軍事侵攻で更に破壊されてしまいました。

「加害性への気づき」

ふと、こんなことを思うのです。このコンゴでは20年以上戦闘が続き、多くの女性たちや子どもたちを含む540万人の人が亡くなり、そして、この国の紛争の一つの大きな原因がレアメタルといった鉱物資源、つまり資源であるということ。それで、考えちゃったのです。

この資源って一体誰が使っているのだろうと。今このジャングルの中で戦っている子ども兵たちが、携帯電話やスマホを使って友達や恋人との通話やチャットを楽しんでいるのでしょうか。僕みたいにパソコンを使ってビジネスを大きくしているのでしょうか。例えば生成AIを使って我々の仕事を豊かにしているのでしょうか。生成AIが使われれば使うほど、僕も使っていますけれども、使われれば使われるほど半導体需要が高まりますからね。あと、電気の消費量も多いし。誰が使っているのだろうと考えたんです。そうしたら、すぐ気付くのです。僕らなんだな。いや、正確に申し上げます。僕はこう思いました。僕なのだ。だから、僕は僕にショックでした。

簡単に言うと、このコンゴの紛争で傷ついている子ども兵とか、あと女性たちの足を踏みつけながら支援しているようなものですよ。自分の使っている物が、自分の欲しい物が、その中にあるものが、これらの紛争を生み出し、こういう人たちを生み出しているのだと思ったのです。ああ、偽善なのだなって。正直に言います。お恥ずかしいのですけれども、よく分からなくなりました。僕、何を変えたかったのだった。僕、何がしたかったのだった。そして、もう一つです。僕にその資格があるのだった。僕にできることは考え続けることでした。「考えることを諦めてしまったら、次に同じようなシチュエーションになったときに、そのシチュエーションにすら気付かなくなってしまうよ。だから、考え続けている限り、そのことに諦めたことにはならないのだよ。」というふうに教えていただいたことがあります。だから考え続けたのです。

考えているうちに、ふとこんなことに気がきました。例えば、どの国から来たか分からない資源を使っている製品を無意味に買い換えてしまうことが、こういった国の戦争を大きくしているかもしれないですよ。もしかしたら、紛争の原因になっている何かが入っているかもしれない。そして、日本って経済大国ですから、たくさん資源や製品を輸入しています。だったら、まずは自分の使っている物や欲しい物がどこから来たかに関心を持つことはできますよね。月に1回でも年に1回でもいいです。そういう視点をもって買うものを変えるということもできますし、これから調達を担当される方だったら、そういう観点で調達先を変えるということも当然できますよね。簡単なことに気付いたのです。僕らが変わればいい。僕が変わればいい。僕らの欲しい物や、僕らの使っている物の中に、例えばこの国の紛争や子ども兵を増やすことや、例えば世界の社会や組織の、我々の祖

国の問題の原因がちょっとずつ含まれていると、勇気を出して、少し勇気を出して認める限り、私たちのささやかな変化や、私たちのささやかな決意や、私たちのささやかな行為は、必ずこの世界にささやかな変化をもたらすことができます。

「微力は無力ではない」

僕らは死ぬまで皆さんにこう申し上げます。私たちは、私たちは、微力ですけれども、決して、決して無力ではありません。微力と無力はまるで違う。我々はどんなにささやかであったとしても、そのささやかな力はゼロではありません。それを掛け合わせることによって大きな力に変わっていきます。そして、微力は掛け合わせると、微力と微力を掛け合わせると勢力になる。そういった観点で世界を見回していると、いろんなことに気付きます。

例えば、ある時期のイギリス、約20年前くらいですけれども「ブラッド・ダイヤモンド」という映画を御覧になった方がいらっしゃるかもしれませんが。そのモデルになったのはリベリア、そしてシエラレオネという国です。ここでは本当に激しい戦闘がありました。そして、その戦闘、内戦の原因はほとんどがダイヤモンド利権でした。ダイヤがどこに行ったかという、多くはイギリスでした。イギリスの若者たちは考えるのです。自分たちの問題として考える。何ができるのだろう、何をすべきなんだろう。インターネットがほとんど普及していない時代でしたから、お金を出し合って新聞広告を作ります。ダイヤモンドのネックレスが血の滴っている合成写真で、簡単に言うとキャッチコピーはこんな感じで書いてあったんです。「あなたは本当に愛する人に、血塗られた戦争の原因になっているダイヤをあげたいと思いますか？ 欲しいと思いますか？」その問いを投げ掛けられた若者たちが少しずつ宝石屋さんに行き始めるのです。そして聞くのです。「これ、どこで取れたの？ どこで加工したの？ それを証明しないと俺たち買わないよ。」と。そんな取組も重なってって、まだまだ不完全ですが、キンバリー・プロセスというダイヤの取引を可視化しようという動きも広がっていきました。

国内外でいろんな動きがあります。2021年に開催された東京オリンピックは、金、銀、銅メダルは全て携帯等から回収された資源を使ってやるというものでしたよね。これは日本、世界にとってもとても僕は大きなインパクト、影響を出したんだなというふうに思っています。

「企業姿勢が問われる時代へ」

あと、最近ではタイガー魔法瓶が、リブランディングするときに四つのノーというのを掲げました。丸投げ生産しない、フッ素加工しない、そしてプラスチックゴミを出さない、もう一つは紛争鉱物を使わない。社内では最初反対の声が多かったのです。「紛争鉱物なんて、何でそんなの消費者にウケるわけじゃないか。」と。でも、ブランド担当の役員が一生懸命「それはやるべきだ、今やるんだ。」と言ったらすごくて、ネットでタイガー魔法瓶四つの約束とか検索してもらったらCMが出てきますので見ていただきたいのですが、超バズったんですね。バズった後に何が起こったか、売上げが伸びただけじゃなくて、一番大きかったのは採用が変わる。若い世代の採用がぐっと伸びる訳ですね。やっぱりいいこと、社会にいい影響を与えている会社に勤めたいという人は日本国内でもいるわけですから、そんなところに刺さっていったんです。

最近、例えば皆さんのお手持ちのスマートフォンについて、まず、日本製に関して言うと、コンゴ産の三つのレアメタル、そして金、合計4種類の鉱物資源は基本的に使っていないと各メーカーがそれぞれ調査をして、統合報告書等に書いています。特に先行しているのがパナソニックさんです。パナソニックさんは、紛争鉱物の取引のルールを決める国際会議にも役員級を派遣しています。要は、きれいな鉱物資源だったらいいだろう。そのルールを作るところに我々は参画すべきだ。そう考えた訳です。更に言うとアップルさんはそれ以上にノーコンフリクトですから、紛争鉱物は一切使わないというふうに彼らは宣言をしています。大きな理由は何かと言うと、やっぱりお金の流れが少しずつ変わってきたということです。単に稼ぐ、儲かるだけでなく、ESG投資をはじめとした環境、社会性、統治がいいという企業に投融資をしようという流れが大きくなってきたからです。アメリカはトランプ政権で、逆にストップがかかりつつありますけれども、欧州はそれを着実に地道にやろうとしているのと、アメリカでもキリスト教の年金基金はこの方針を堅持したままです。そんなに簡単にその流れが消える訳ではない。そんなふうに我々は考えています。

「児童労働は“身近な問題”」

あともう一つ、身近なところで言うと、こんなことも

あります。子ども兵も含めて、強制的に子どもたちが危険な労働に携わっていることを児童労働と言います。皆さんよく御存じだと思います。世界の子どもの10人のうちの一人が児童労働に携わっていると言われていて、実はコロナ禍を経て減っていたものが増えています。ちなみに、先進諸国の中で、OECD諸国の中で、児童労働の潜在的なリスクや搾取が深刻化している国がありまして、それは我が国日本です。建設産業と性産業では、障害のボーダーすれすれの子どもたちが、いわゆるセーフティーネットとして吸収されているという事案がたくさん見受けられます。決して児童労働とは海外の問題ではありません。国内の問題でもあります。その多くは、経営者が児童労働は悪いことだと知らないということが起因していることも多いんです。大変だから助けてあげる。そんな気持ちだったりします。だから、ちゃんと正しい情報を伝えていくということも、僕はすごく大事なことだなと思っています。

児童労働の激しい産業というのが幾つかありまして、一つが綿花ですね。綿花を摘むには5歳くらいの子どもの手がいいのですよ。だから、インドなんかでは子どもたちをかき集めてきて、綿花を取らせて上から飛行機で農薬をバーッとぶっかけていく訳ですね。もう一つは何かと言うと、皆さん御存じのとおりカカオ産業ですよ。カカオは高い木になります。小さい子どもの方が登りやすいのです。あと、下草刈りとか結構メンテナンスが大変です。人件費をかけて大人を雇うよりも、子どもを買ってきて低賃金で働かせた方が低コストでカカオを採取することができます。特に、コートジボワールやガーナ、あとコロンビアやエクアドル、そんな中で児童労働の事例が多く見受けられます。

「児童労働へ立ち向かう日本企業」

児童労働は、日本は珍しく企業が率先して取り組んでいる課題の一つです。特にロッテ、あと明治製菓、そしてもう一つが有楽製菓です。あと、世界的にはゴディバなんかもそうですけれどもね。有楽製菓さんが何で興味関心を持ったかという、2018年に愛知で僕が講演したときに、この会長の河合さんという人がいらっしゃって話を聞いていたんですね。子ども兵の話、児童労働の話、チョコレートがこうだよという話をしたときに超衝撃を受けたのだそうで、河合さんからうちに翌日メールが来たのです。テラ・ルネッサンスに寄附してくれるのかなと思ってウキウキで開いてみたら、児童労働のことを勉強したいから他の団体を紹介してくれという

話だったのです。ですが、社会課題が解決するのだったらいいのです。

御存じの方もいるかもしれませんが、日本で最も児童労働全般に取り組んでいるのがACEという団体です。日本でできた団体です。今は海外の児童労働だけでなく、沖縄における国内の児童労働の問題にも、沖縄の経済界や行政の皆さんと取り組み始めていますので、御関心のある方は是非調べていただければと思います。とても優れた団体で、そこを紹介したんです。これが2018年でした。河合さんはすごくて、ブラックサンダーに使うカカオ豆の全量を児童労働じゃないものに切り替えました。具体的には、2022年の確か9月に、ブラックサンダーに使っているカカオ豆を全て児童労働でないものに切り替えました。さらに、去年新しいことがあって、ブラックサンダーに限らず、有楽製菓に使うチョコレート製品の全てを児童労働でないものに切り替えました。ブラックサンダーが原料を変えたときに、児童労働ではない流通量の少ないカカオ豆に切り替えたとです。

二つ面白いことがありました。一つは、味が変わらなかったことです。なぜかと言うと、研究開発部門が死ぬ気で頑張ったからです。これは我々の問題でもあります。社会貢献って、経営者だけがやっていたら道楽です。でも、それが全社にわたって本気でやるべき課題なのだったときに、それは経営革新につながっていきます。自分たちを変えていこうとイノベーションにつながっていく。そう、イノベーションを起こすためには利他の精神が必要です。誰かのためにこの問題を解決していく。そこに技術革新や組織のイノベーションが生まれてきます。何となく変わろうと思っても人や組織は変わりません。

もう一つ面白かったのは、この商品は、材料を変えて一定期間ですけれども、1個30円という定価を変えなかったことです。何ですかと聞くと、担当の人はこんなふうに言っていました。「1個30円だったら小学生も買えますよね。皆さん、コンビニで買っていただきたいんですが、QRコードを見ると、多分今もそうだったはずなんですけれども、ブラックサンダーの商品紹介じゃなくて、有楽製菓の児童労働の勉強ができるページに飛ぶんです。これを見たら、小学生が友達同士で、お父さんとお母さんと一緒になって児童労働のことを勉強してくれるでしょ。すると、その子どもたちが大きくなったら、それはいけないことだよと声を上げ始めますよね。そうしたら社会って変わっていきませんか。我々にとって大事なことは、我々の理念を実現することです。我々の理念とは、我々の商品を通じて世界中の子どもた

ちを幸せにすることなんです。」彼はそう言っていました。

「課題だけでなく、解決する人を支える」

今日、様々な社会課題や、特に人権にまつわる課題はたくさんあり、これからも増えますが、是非皆さんにお願いしたいのは、そこで留まらないでくださいということです。それに向かって取り組もう、改善しようとする当事者の皆さんや、その当事者と共に立ち上がろうとする人々も、この日本や世界の津々浦々にいるということ、是非皆さんに知っていただきたいのです。

希望は探しに行かなければいけません。絶望から目をそらせということを言いたい訳じゃないんです。十分左目では絶望を見なければいけません。でも、それだけだと自分が動かなくなり、そして動けなくなります。だから、その先に向かって動いている人たちのことも、今日は是非皆さんに知っていただきたいと思います。何かを全部変えたい訳ではありません。今を変え続けようとする人たちが、この世界に津々浦々いるのです。その人たちを、行政の皆さんだったら法律や制度で手助けをすることも十分これから可能なことであったりしますよね。そのことも是非合わせて、課題を知るということは、課題だけじゃなくて、課題に立ち向かう人がいることを知ることなのだと知っていただけると有り難いと思います。

ウガンダでは、2005年から元子ども兵社会復帰支援プロジェクト、元子ども兵に社会復帰してもらうために、応援する事業を展開しています。どんなことをやっているかと言うと、この写真に映っている施設は四棟あり、一か所に四つの施設があるんですけども、そこに毎年30名から50名の元子ども兵を受け入れています。年齢は20代半ばですので、ほとんど皆さんと同じ年です。子ども時代に兵士だった人たちは、体は大人になっているけれども、子ども時代に学校には行けませんでした。そのため、文字の読み書きや計算が分からなかったりします。職業訓練を受けた訳ではありませんので、仕事のやり方が分からなかったりもします。

もう一つ大きな弊害があるのが社会復帰です。それは何かと言うと、子どものときに誘拐されて兵士になり、そのまま軍隊の中で大きくなっているの、強い武器を持っていたり、権力があつたりすれば周りが言うことを聞いてくれる環境で育っているのです。そのコミュニケーションスタイルのまま、脱走してきたり、解放されたり、怪我をして放り出されてきて、自分の村に戻って

きた訳なのです。何が問題かと言うと、コミュニケーションが難しいのです。自分の気持ちをどう伝えていいかが分からなかったり、相手の気持ちをどう受け止めていいかが分からなかったりという事象がたくさんあります。そのために、自分の村や町で暮らせないという事象が、事例がたくさん起こっているのです。ですので、体は大人、皆さんと同じぐらいの大人だったとしても、子ども時代に兵士だった人たちが社会に戻るには、何らかの支援が必要なのです。

「3年間の社会復帰プログラム」

そういった人たち、そういった年齢の元子ども兵たちを毎回30人から50人、毎年受け入れて3年間支援させていただきます。最初の1年半、施設の中でまず行うのは心のケアです。ダンス、ワークショップ、いろんなものをやりながら心のケアをしていきます。生活に必要な知識も学んでもらいます。計算、英語、そして健康に必要な知識。次に職業訓練です。お金を稼ぐための技術をしっかり学んでもらいます。

1年半経ったら、毎年受け入れている元子ども兵一人一人にお金を貸します。10%の利子を付けてお金を貸し出すのです。これで開業資金にしてもらいます。一人一人に事業計画を作ってもらって、お店を開いてもらうのです。残りの1年半、我々がコンサルタントみたいに関わって、つまりお店を運営する、お金を稼ぐということを実地で経験してもらいます。1年半、お金の稼ぎ方、経営の仕方を勉強して、つまり、支援をしてから3年経った時点で僕らの支援を卒業します。そのまま自分のお店を続けてもいいですし、その経験を生かして就職してもいいです。そうやって自分の所得で自分と自分の大切な家族の暮らしを成り立たせていく。それが私たちの社会復帰支援プロジェクトの目標です。

じゃあ、どんな変化があったかと言うと、これまでサポートしてきた361名のウガンダの元子ども兵たちの月収は約50倍になりました。ほとんど稼げなかった元子ども兵たちなんですが、大体7,000円を稼ぐようになりました。実はこれ、更に超えていまして、今は8,280円です。ちなみに、ウガンダで公務員の平均月収が約7,000円ですので、今はそれを超える金額になっています。ウガンダでは、レストランのウェイトー、ウェイトレスが大体月収3,000円の世界です。

ただ、これだけ稼げたよということがすごいのではなくて、収入が上がるにつれて、周囲との関係性が改善してきたことに我々はびっくりでした。周囲との関係性が

改善するってどういうことかと言うと、自立をするためには周囲と適切な良い関係を築くことがとても大事です。簡単に言いますと、安心して喧嘩ができる関係。これは心理的安全性といいます。喧嘩をしたとしても、また修復できると信じ切れるから、率直なフィードバックができ、恋人や家族としっかり向き合える訳ですね。

「支援の難しさ」

でも、不思議ですよ。子ども兵の周りにいたこの村の人たちは、この元子ども兵たちに対してこういうふうに言っていた人たちですよ。お前は悪魔だって。元少女兵の神の抵抗軍は俺の親父を殺したよね、息子を目の前で引き裂いたよねって。子ども兵の問題、特にウガンダの子ども兵の問題解決が難しいのは、彼らは被害者かつ加害者であるということです。だから難しい。

我々援助業界の闇みたいなことを言いますけれども、こういうふうに解決が難しいということは、支援の成果が出にくいんですよ。特に人権にまつわる課題に取り組む団体が少ないのもそうで、何でかと言うと、すぐに成果が出ないからです。きつい言い方をしますが、でも、自分たちの恥ずかしい話なのですが、成果が出ないときには寄附金も集まらないし、助成財団の助成金も集まらないし補助金なんかも集まらない訳です。

例えば、カンボジアで学校を建てるプロジェクトとかいっぱいあるじゃないですか。カンボジア、学校が足りませんよ。大事なのです。でも、日本ってよく見ると、日本の人たちがカンボジアに学校を建てる時にある傾向がありまして、空港から伸びる国道沿いにいっぱい建てちゃうんですね。なぜだか皆さんお分かりになりますか。皆さんが行きやすいからです。皆さんの仲間を連れて行きやすいからです。だから、支援は偏在するのです。

東日本大震災でもそうだったと思います。交通が確保されたところ、東京から行きやすいところはボランティアの数も資金も多く集まりましたけれども、偏在していました。要は、辺境なところというのは人もお金も行きにくかったんですよ。正に今の能登なんかそうですよね。半島の先ですから。光の当たるところにしか集まらないという傾向があります。それは我々の恥ずかしい部分です。だから、テラ・ルネッサンスはそれをしません。最も困難なところに支援をするって意地のように決めて、今も続けています。

話を戻すのですが、周囲の人々との関係性がなぜか改善することについて、分析をしました。すると、こ

の数字が関係していることが分かりました。それは自尊心です。自分を大事にする気持ちです。自分を適切に自分自身で大切にしている気持ちです。これは、人間の幸福度に最も関係しています。武蔵野大学の前野先生という方が幸福学を研究されていますが、前野先生もいわゆる自尊心の向上というのが幸せに関係していると提唱しています。OECD諸国で10代と20代の自尊心が一番低い国も我々の国日本ですよ。これは我々祖国の大きな課題だと思います。

「お金以上の意味がある“働く”」

この自尊心が跳ね上がったんです。統計を取って分析してみたところ、あることが分かりました。働いているからということです。働くということは、誰かを信頼して誰かから信頼されて成り立つものですよ。ビジネスなんていうのは、人から信頼されて、人を信頼して、物の売り買いをして利益を上げることができます。相手から信頼されないと、皆さんだって仕事をしても相手に受け取ってもらえないですよ。彼らは働くことを通じて、人を信頼する、人から信頼されるということをもう一度体験を通して学び直していたのです。働くという言葉がそのとおりですよ。働くとは、金を稼ぐという意味ではなくて、あれは仏教の言葉ですよ。

そんなことを教えてくれたのは、このモニカという女性でした。モニカは13歳のときに神の抵抗軍に誘拐されました。たった2年間で、モニカはあることを決め、高利貸しに行きました。途上国の女性の問題は、銀行口座が開けないことです。銀行口座が開けないって想像できないかもしれませんが、開けないから高利貸しに行くしかお金を借りられません。そこでお金を借りてきて、自分のお店の隣の部屋が空いていたので、そこを借り、高利貸しで借りたお金を使ってミシンを10台買ってきて、学校を開くことになりました。つまり、彼女は洋裁の学校の今は校長先生であり、経営者でもあります。これまでに、約180名のその村や近隣の村々の女性たちがこの学校で洋裁の技術を学びました。

僕も見に行ったときに、面白い光景がありました。多分、10代後半の女性で、1歳ぐらいの子どもがいたのですが、あやしながら一生懸命モニカの話聞いていたところ、モニカが黒板にデザインを描き始めました。そうするとノートを取らなきゃいけないですよ。ですが机を買うお金がなかったらしくて、椅子とミシンしかないんですよ。そうしたら、どうしたかと言うと、子供たちを一生懸命寝かしつけて、その18歳か17歳の子が椅子

に座って、座った膝の上に赤ん坊を置いて、赤ん坊を机代わりにして、その上にノートを置いてぱっとデザインし始めたんですね。その筆圧で起きるんじゃないかなと思ってびっくりしました。限られた条件、制約のある中でも、何ができるんだろうと一生懸命考えて、そして一つずつやり続けたんですね。こんな彼女たちが私たちに教えてくれました。人は変わることができる。いつでも、いつからでも。そして、いつまでも。ただし、一つ条件があります。当事者が本気で変わりたいと思ったときに、その人は変わります。すごく失礼な言い方をしますが、人や組織は他人です。その地域が本気で変わりたいと思わない限り変わらないんです。どんなに事例を横展開していたとしても、インセンティブを付けたとしても、その当事者が本気で変わりたいと思わなければ、やっぱり変わらないのです。

ただし、インセンティブを付けるとか、支援を行うとか、できることはあります。きっかけを作ることができます。そういう環境整備をしていくことが私たちの支援なんだろうなと思っています。支援をすることによって、変わりたいんだ、変われるんだと、そう思ってもら。それが、外部者の大事な役割なんだろうなと僕は思っています。

「営みを取り戻す」という希望」

何でそう思ったかという、最後に申し上げるんですが、アフリカの人たちが、元子ども兵たちが、私たちにある大事なことを教えてくれたある一日があったからです。それは何かと言うと、2011年3月11日です。いわゆる東日本大震災が起こった日ですね。私たちは、岩手県の大槌というところで、大槌刺し子という事業をこの13年、営ませていただいています。

基礎自治体の中で大槌町だけ、東日本大震災の被災自治体でこの町だけで起きたことって皆さん覚えていらっしゃいますか。首長が亡くなられましたよね。だから、総務課長が8月まで町長代行するという、本来はなかなかあり得ない状態が続いていました。行政のリーダーシップが失われるということは、当然災害や紛争においてはあり得ます。あり得るから、だから、民の力を最大限発揮する訓練をしておかないと、行政だけではやっぱり成り立たないことがあるというのは、私たちの14年前の学びだと思うのです。

2011年5月くらいです。大槌に行くと、避難所である共通した出来事がありました。おばあちゃんたちは口々に言うんです。やることがないと、思い出すのはあ



の日のことばかりなんだと言い始めるんです。言い始めたんです。だから、調べてみました。色々ヒアリングしてみると、岩手の沿岸では、手内職で刺しゅうや洋裁をしている女性と比較的多いように見受けられました。ミシンは場所を取るけれども、布と糸と針さえあれば狭い避難所でも手仕事はできるので、それを我々が加工賃を渡して買い取って代わりに販売すれば生活再建、つまり仕事になりますよね。

皆さん、家庭科の授業を覚えていらっしゃいますか。縫うって集中しますよね。これは今でいうマインドフルネスです。瞑想と同じ効果を持ちます。心のケアにつながるということで、まずは、布巾とコースターを避難所で作ってもらうところから始まりました。

そして、東北には刺し子というすばらしい技術があります。大槌には元々なかったんですが、刺し子を現代的にアレンジして作ってもらいました。おかげさまで、13年間、大槌刺し子を続けてきて、これまでに大体1億9,700万円くらい販売をしまして、約4,800万円を180人の大槌の女性たちにお支払をすることができました。

このプロセスは『いとなみを取り戻す』というこの本の中に書いてありますので、御興味がある方は是非お読みいただきたいと思います。とても面白かったのは、大槌町には刺し子という産業も技術もなく、伝統工芸と呼ばれるものもなかったのですが、2年前、ちょうど震災から11年が経過したときに、岩手県から「大槌刺し子を伝統工芸に加えていいですか」という連絡が来たことです。たった11年で伝統になるのだと思って、すごくびっくりしました。でも、大槌と我々にとってみれば、ある意味すごく誇りになりました。

「覚悟が行動をつくる」

大槌刺し子の中で出会ったたくさんの素晴らしい人た

ちがいます。2011年の半年間、大槌刺し子に関わってくれました。縫うのが速いんです。半年間で90万稼いでいました。商品が布巾とコースターしかないときです。我々は、継続することが大事だと思ったので、買取り代金をべらぼうに高くはしていませんでした。

何を言いたいかというと、それだけ稼ごう、90万も稼ごうと思ったら、夜なべもしないといけませんでした。めちゃくちゃ縫いました。何で縫ったか。何で縫い続けたか。理由は一つだけあったのです。彼女は小川さんですけれども、妹さんが一人いらっしゃいました。妹さんは、この町内で焼き鳥屋さんをやっていました。そして、妹さんはあの日から今に至るまで、まだこの町に帰ってきていません。だから、小川さんは、テラ・ルネッサンスがやっている大槌刺し子と出会って、裁縫が得意だったので、一つ決めたのです。「焼き鳥屋を再建するんだ。自分の手で再建するんだ。それが私の妹への向き合い方なんだ。」自分で決めた目標だから、自分で納得した目標だから、人のせいにはしないのです。ただ、やり続けるんです。ただ、縫い続けるのです。縫い続けて、縫い続けて、縫い続けて、2011年12月だったと思います。妹さんのやっていた焼き鳥屋を再建することができました。今はもうお嫁さんが継いでいますが、大槌駅前に「七福」という焼き鳥屋さんがありますから、もし機会があったら是非行かれてみてください。焼き鳥屋なのですが牛もつ煮込みが美味しいので。

何を教え、何を皆さんと共有したいかというと、小川さんが夜焼き鳥を焼いているときに、そんなに語らないのですよね。でも、僕は行くたびに思うのです。これがリーダーシップなんだと。リーダーシップとは、役職や肩書や経験や性別には全く関係がありません。何かを自分でしたいと思って積み重ねていくときに起こる影響力のことなのだと思うのです。そう、リーダーシップを適切に日本語に訳すとすれば、僕は影響力と訳します。影響力は誰もが発揮できます。だから、皆さんも発揮しているはずです。上司に対して、周りの人たちに対して、国民や様々な人たちに対して、年齢や経験や年次に関係なく皆さん既に発揮しているし、願わくは、その影響力を強く優しく逞しくしていただきたいと思います。そうすることによって、人権や様々なこの国の課題に僕らはもっとしなやかに取り組めるようになると、そう僕は思うのです。

「人権とは“人の可能性”」

そんなときです。ウガンダから一本の電話がかかって

きました。ウガンダのスタッフのトシャ・マギーと言います。ウガンダでも日本の津波の映像を見て、日本でたくさんの方が苦しんでいる。私たちのことを思い支援してくれる日本の皆さんが今苦しんでいる。じゃあ、今私たちには何ができるかを考え、募金しようということになったのです。稼ぎ始めた元子ども兵たちで、テラ・ルネッサンスのウガンダ人の職員の給与の中から少しずつお金を出し合い、半日もしないうちに集まったお金の額が約5万円でした。ウガンダの公務員の平均月給は7,000円です。そういう国での5万円です。自分たちのために使ったら、もっとおいしいものを食べられたはずですよ。いい服も買えたはずですよ。それでも、自分たちよりも豊かだけれども、今大変な日本の人たちのために捧げようとしたのです。

電話口で言われたのです。「そのお金を使って毛布を買ってあげて。寒いでしょう。つらいでしょう。」と。そして、最後にこう言われたのです。「じゃあ、あなたたちは何をするの？ 同じ日本に住んでいるあなたは一体何をするの？」そう言われたのです。だから、僕の中からどのようにやるかという心がフッと浮かんできて、東北、そして今、お陰様で岩手大槌の皆さんと御縁を結ぶことができています。

さっきのトシャ・マギーが、被災をしたテラ・ルネッサンスの関係者にこんな手紙を書いてくれました。少しだけ御紹介したいと思います。

「どうぞ、諦めないでください。私たちは互いに支え合い、お互いを必要としています。今まで日本の方々は私たちアフリカに多大な支援をしてくださいました。私たちはそのことを心から感謝しています。今、私たちは遠く離れたアフリカにいますが、心は日本の被災した皆様と共にあります。アフリカの紛争に巻き込まれた私たちは、今日が最悪の日であっても、明日はよりよい日になると希望を持って生きてきました。絶望の中にも、必ず世界は私たちを見ていてくれる。そう信じて生きてきました。どうか皆さんも、心に絶望を感じても、必ず明日は変わるということに希望を持って生きていってほしいと思います。私たちも、今日よりもよりよい明日が日本の皆様に訪れることを心より願い、祈り続けています。私たちは皆様と共にいます。」

こう言ってくれたのは、アフリカのウガンダの元子ども兵たちや、そこの紛争の最中で生きている人々でした。

今日、人権というテーマでお話をさせていただきました。人権課題を知ることと同時に、人権とは何かと言うと、それは人の可能性です。つまり、人権侵害とは何か

と言うと、人の可能性を不条理なことで摘んでしまうということです。だからこそ、その不条理を一つでもなくしていく。我々は民間の立場で、そして皆さんは政策を立案し遂行していくという立場の中で、一つ一つの国民の可能性を閉ざしているものを減らしていく。そして、その可能性を伸ばしていく。そんなプロセスと一緒にあって取り組んでいくことができたらいいなというふうに思っています。

質疑応答

○**研修員** 被災された方と、東北とかじゃない被災していない状態で、気持ちとかが全然違うところに入るのは怖くないのかというか、どういう気持ちだったのでしょうか。私だったら怖くて足がすくむなと思いました。

あと、小川さんとかそれ以外の方って今どうされているのでしょうか。大槌に行ったときに未だに何もない状態でびっくりしちゃって、そういう状況を今どう受け止めているのかとか、どういうことをふだん小川さんとかから言われるのかを、教えていただきたいです。

○**鬼丸講師** もちろん当事者の方に対しては失礼な言い方になりますけれども、外部から入るものとして恐れはありますよね。怖さはあります。でも、ある意味、僕は健全な恐れを持っておいの方がいいと思うんです。要は、恐れがないままで、例えば紛争とか災害の現場に入ってしまったときに、ちょっと誤解を招きやすい言い方なのですけれども、やり過ぎてしまうということがあります。現地には現地のスピードであったり、あと、いくら支援を受けたくても受けられない環境があります。そういったものと併せながら、一緒になって復興や支援を進めていく必要がある中で、自分自身を一つセーブする、適切にコントロールする観点でも、恐れと向き合う必要性はまずあるなと思っています。そのときに、正当な恐れ、正しい恐れと、正しくない恐れがあって、正しくない恐れって何かというと、それは臆測やイメージなのだと思うのですよね。だからこそ、僕らが大事にしているのは対話です。当事者の方や当事者の周辺にいる方々とまずしっかり話をすること。これはコンゴにおいても、ウクライナに入ったときでも、カンボジアでもそうだったし、大槌でもまずはそうでした。話をする中で生まれてくる何かがあるので、そこは自分自身の恐れを克服ではなく受容していくプロセスになるのではないかなと思ったりもしています。

○**研修員** 大槌の方が今どういう具合でいるのかお聞き

したいです。今の状況をどんなふうに思っているのかや元気になったのかなど。

○**鬼丸講師** うちの刺し子で縫っている刺し子さんたちはとても元気です。この前、某アパレルメーカーと一緒に「サシコギャルズ」という新しいブランドを作ったんです。それこそ、それは大槌だけではなくてほかの被災地の皆さんもそうだと思うんですけれども、結局災害が、紛争が起きて一定期間の復旧期ってみんな抱えている課題は共通で、それを超えたら今度は課題は個別化していくんですよね。なので、元気になる人もいれば、元氣になれない人もいますので、一概にこうだということは多分申し上げられない。だからこそ、一人一人や一世帯一世帯の事情に合わせながら、我々が関わっている人にカスタマイズして支援を届けていくとか、そういったことが大事じゃないかなというふうに思っています。

○**研修員** 課題を一緒に取り組む仲間を探すことも課題に取り組むことのひとつとか、結構、背中を押される言葉をたくさん頂いたなと思っております。当事者であることを認めることにに関してなのですが、当事者であることを認めたときに、自分の変化が課題に対して伝わるようになるというのがすごく印象的でした。当事者であることを認めるときに、人って結構怒りとか、ちょっと認めたくないという気持ちが出てくるなと思って、自分自身も実際あったんですけれども、そういうとき、これまでどういう語り口で説明してこられたのかというのを聞きしたいです。

○**鬼丸講師** できるだけ断定をしない、決めつけないということを我々は、私は大事にしてきました。特に、プレゼンとか対話の中でも、たくさんの感情が聞き手の中に起こります。まずそれを一旦受け止めさせていただいて、私も同じなんですよという立場から対話を積み重ねていくという工夫をしてきました。どうしても立場が変わってくると見解も変わってくる。なので、まず、しっかり相手の声と、もう一つ大事なことがあります。自分の声を聞くことを是非やっていただけると、何か見つかるのではないかな。ついでにそれも書き留めておくといいです。そうすると感情の扱い方が見えてくるので、本当に大変なときでも乗り越えることができるだろうなと思います。

○**研修員** 貿易の停止とかに関しての質問なんですけれども、やはりそれはもちろんすごい大事なことはあると思うんですけれども、一方で、それによっていい意味でも悪い意味でも影響力が大きいと思っていて、それで

貿易が停止して、外貨獲得の手段がなくなって、仕事が無くなって、より悪い状態になるみたいな、そういう懸念もあると思われるので、そこで大事だと思うのが、ちゃんと正に実情を観察して本当に人権侵害があるのか、又はないのかというのを知る必要があると思うのですけれども、そういった企業などが取り組んでいる中で、あまり実情と合っていないとか観察し切れていないと思われることはあるのでしょうか。

○**鬼丸講師** これありますという怒られますね。例えば紛争鉱物の問題でも、例えばコンゴの鉱山別にタグが付くのですよ。それによって、これはいわゆる武装勢力の支配している鉱山が支配していない鉱山が見分けるというふうにして、要は、流通に乗せていくのですけれども、みんな、紛争に関係ない鉱物を使っているよと言ったりするのです。でも、現場の人間からすると、時々起こる事例があって、タグの売買です。そもそもその制度が形骸化しているという話は実際ありますが、だから駄目だよねという訳じゃなくて、それでも遵守しようと一定の規則や規範をどれだけ徹底していけるかどうか、そこは官と企業側と我々サイドが共通の目標として一生懸命啓発に努力し社会実装に向けて努力していくところなのだろうなというふうに思っています。

○**研修員** 問題を観察するということの重要性をお話しいただいたと思っています。その中で、その場の人の対話、その場の人と会って実際ちゃんと対話してみるということが大事だと伺ったのですけれども、やっぱり結構、社会問題の当事者って現場にいる人が近過ぎて、どうい

か自体を認識していないということがあると思っていて、また、それに関してヒアリングをすることになって、こちらがどういう質問を投げ掛けたら実態が分かるのかが分からなくて立ちすくんでしまうということが結構あるのかなと思っているのですが、そこをどういう質問を心がけていращやるのか、お伺いしたいです。

○**鬼丸講師** そのとおりなのです。大事なことがあって、これも本当誤解を招きやすい。だから、我々、外部の支援者とか、例えば皆さんもそうかもしれないけれども、当事者の人たちに対するリスペクト、そういうサバイバーの人たちに対するリスペクトを持ちながらも、当事者に同化しないということが大事ですよ。リスペクトしても感情的に同化しないということ、いわゆる問題、その人の周辺にまず同化しないということです。

何でそうしなければいけないかというと、その状況が生まれている背景には、その人に起因するものもあるんですけれども、その人と周囲の関係性によって起きていることが結構あると思っています。とすると、見なきゃいけないポイントは、その人そのものの歴史的な背景や課題にしっかり向き合いつつも、周辺の家族であったり、例えば地域の特性だったりも見なきゃいけないので、同化してしまうと俯瞰して見られませんか。そういうところが大事です。

当事者のヒアリングだけでなく、やっぱり周辺部分でのヒアリングもして行って、掛け合わせて行って実情をできるだけ見るように努力しています。ただし、メチャクチャめっちゃくちゃ時間がかかります。でもやらないと精度の高い支援ができないので、そこはうちの現場は結構苦労してやるようにしています。